

## 第3章 旧齋藤氏別邸庭園の現状と課題

### 第1節 庭園全体の現状と課題

旧齋藤氏別邸庭園については、大正期における作庭以後、所有者変更による庭園の改変、樹木の経年変化等にもない、当初の庭園景観、地割構成と異なる部分が存在する。具体的な課題としては、個別に詳述していくが、まず把握しておくべき庭園全体の課題としては、植栽に関する課題と、工作物に関する課題が挙げられる。

#### 1 植栽に関する課題

本庭園に見られる樹木は、約1,060本（モウソウチクを除く）、70種類が確認される。常緑樹は約780本、落葉樹は約280本で、およそ7割が常緑樹、3割が落葉樹という割合となっている。これらについては、全体的に樹勢が良好ではなく、腐朽の進んでいる衰弱木も認められる。また、特に主庭の砂丘斜面では、樹木の枝葉の繁茂によって滝の存在や地形の様相が主屋からでは視認できないところもある。

#### 2 工作物に関する課題

本庭園には、主屋周辺を中心に、袖垣や四つ目垣等、約20点の工作物が配置されている。これらの多くは、加賀田家時代の袖塀、垣根等が残存しているものといわれており、本庭園の様式や意匠とは調和しないものが含まれる。庭園工作物をどのように扱うか、意匠や造作等に関する定まった方針がないため、その考え方を検討する必要がある。

### 第2節 庭園の景観構成に関する現状と課題

旧齋藤氏別邸庭園の景観としては、表門を視点場とする玄関庭のアプローチの眺めや、主人書斎や事務室（旧応接所）を視点場とする中庭への眺めもある。また、玄関の間を経て座敷に至った際の庭園景観の意外な広がりもあげられる。ここでは、本庭園でも特に重要と考えられる主庭および茶庭の景観に関する現状と課題を整理しておく。

なお、主庭の公開活用上の順路は、主庭下座敷の沓脱石を起点とする右回りの動線を想定しているが、池泉東の石橋に付設された欄干の正面が南を向き、その石橋から斜面上部の春日形、池泉の雪見形、斜面下の般若寺形の各灯籠が一体的な景観を構成する点、橋石の大きさが北になるほど小さくなる点を考慮すると、左周りの動線も検討する必要がある。

本庭園の重要な視点場は7箇所ある（図3-1）。各視点からの現状と課題を整理する。

#### ①主屋1階と2階からの視点

主屋1階からの「仰角型広角景」（砂丘の斜面を仰ぎ見る水平方向の眺め）と2階からの「俯瞰型集中景」（滝や水面等に視線が集中する眺め）は、特に本庭園を特徴づける景観構成である。

建物1階座敷から見える仰角型広角景は、斜面を強く印象づけ、視線は水平方向から徐々に上部へと導き、景観が上下に展開し、立体感を創出する。ここからは両翼に広がる広角の景色も同時に味わえ、サルスベリ（280）は、この視点場から東側奥に確認できる（図3

ー1の平面図中①、A部断面図参照。以下、丸数字は図3-1における視点場と対応)。

主屋2階からの俯瞰型集中景は、正面の樹海・紅葉谷と池の水鏡そして動きのある滝石組に視線が集中するように構成する。西側小間からは、滝口一点に視線が集中しており、迫力のある景色と連動している(図3-1①、およびA部断面図参照)。これらは砂丘地形を利用してダイナミックな景色を表現した本庭園一番の見どころといえる。

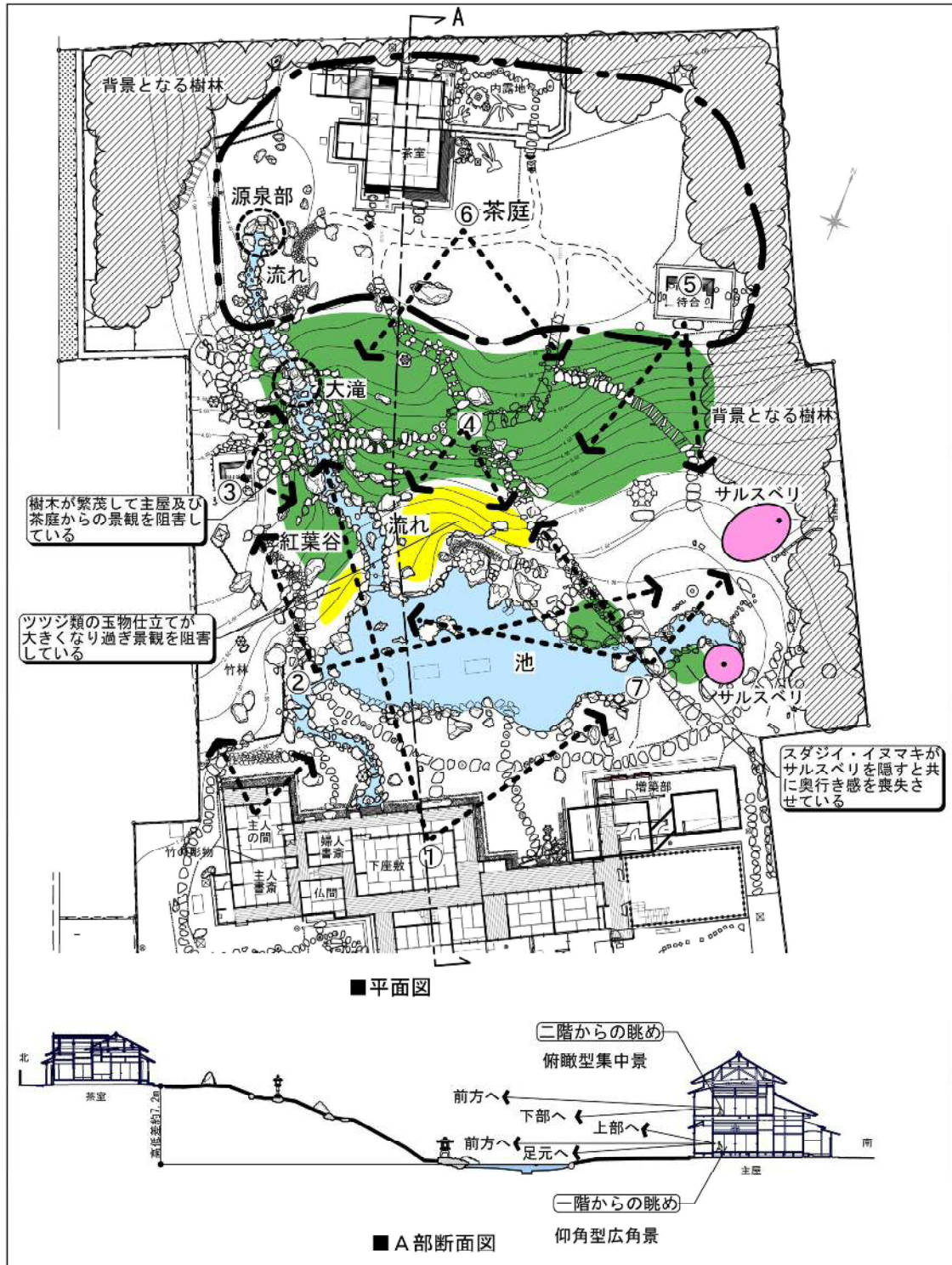


図3-1 主庭および茶庭の景観構成と視点場

課題としては、加賀田家時代に植栽された池泉縁辺のクロマツや実生と思われるタブノキ(445)、ツツジ類の玉物等が大きくなり過ぎ、それらが主屋に対して平行に立ちはだかり落葉期以外は砂丘地形の肩や茶室、紅葉谷、大滝、東奥にあるサルスベリといった根幹をなすダイナミックな景観と奥行きが感じとりにくい点があげられる。

### ②庭園西側、橋上から③田舎屋への道程と視点

庭園西側、橋上からの視点(図3-1 ②)。東西に長い池(約36m)を介して奥行きを創出し、夏季はサルスベリの花が背後の深緑と好対照をなす。田舎屋までの道程と視点(図3-1 ③)。②から③へ筑波石でしつらえた山路(階段)を登り、山の奥へ分け入るような雰囲気演出し期待感を高める。竣工後約1世紀を経て竹林を西側に控えながらも、まったく損失のない筑波石の階段と畳石の造作は秀逸であり、当時の施工者の技術の冴えと感性の高さを表している。モミジ林や竹林を縫うように園路を右へ左へと振り、その先に大ぶりの筑波石が視線を引き締める。山腹の田舎屋は、山路(階段)を登りながら左上方に見上げる位置に、建築としてもっとも美しく見える妻側を見せるように配置させ、滝・流れの音と冷気を感じさせる装置として、あたかも山中のごとき環境を知覚させ「夏の別邸」としての醍醐味を体感できるしつらえになっている。

課題としては、まず、夏に咲くサルスベリ2本(280, 565)が橋上からみえにくい点である。サルスベリそのものの樹勢が弱っていることと手前にスダジイ(308)やラカンマキ(277)などの常緑樹が繁茂している点である。次に、山路(階段)の西側、竹林の土留めに瓦を使っている点であり、筑波石の階段と畳石の仕事とは対照的で粗末である。竹林の西側、隣家との境界にはブロック塀があり庭園の雰囲気阻害している。山路(階段)東側のイロハモミジは、若干、繁茂し過ぎている。また、庭園全体としていえることであるが、ツツジ類が玉物仕立てで大きくなり過ぎ重い印象で景観を阻害している。

### ③田舎屋から④中腹の広場までの道程と視点

中腹の広場までの道程と視点(図3-1 ④)。田舎屋から飛石を下り、左に大滝を見る。海老ヶ折石で組まれた比高約3.8mの迫力のある滝である。溪谷を経て上りになり中腹に至る。下りから上りに転じる高さの変化、暗く涼しい印象の溪谷から明るく開放的な景色へ、陰から陽へと、この短い距離のなかで表現をしている。中腹の広場は敷地内で唯一、四方の園路が交差する動線上の要所であり、主屋の2階床高さと同レベルである。ここからは主屋の凛とした正面性を顕在化させる視点場ともなっている。

課題としては、中腹の広場からは主屋の姿を美しく見ることができ、後方に高層ビルがみえてしまう。昨今の社会状況を考えればやむをえないかもしれない。



図3-2 仰角型広角景



図3-3 俯瞰型集中景



### ⑤待合からの視点

待合からの視点（図3-1 ⑤）。主屋の芝庭より約7.2m高い場所に位置する。礼拝石が据えられており竣工当初は南側への展望、主屋の後方に見える寺院の薨の波と、空の広さを認識させ、主屋を望む視点場となっていたと思われる。

課題としては、生長しすぎた樹木や実生の樹木が多く、本視点場の特徴である展望がまったくきかず、空の広さも感じられない点でのびやかさが失われている。東側下方に、資材置き場が見えるのも庭園の雰囲気阻害している。

### ⑥茶庭からの視点

茶庭（図3-1 ⑥）も砂丘地形の上方からの眺望を特色とする。

課題としては、生長しすぎた樹木や実生の樹木が多く展望がきかない点である。

### ⑦東側橋上からの視点

東側橋上からの視点（図3-1 ⑦）。橋の西側の島には「浩養園」より運んだ石製の欄干柱があり、「おなりはし」と刻んで格式の高さを示す。この視点場からは西側に池の水面の広がりとお行きを演出し、東側には夏に花を咲かせるサルスベリを、かつ丘上への階段を隠見させることにより期待感と高揚感を誘発させる。この階段は段鼻の筑波石と、踏面の洗い出しによって瀟洒な仕上げとしている。西側の田舎屋へ至る山路風の階段は踏面にも筑波石を畳んでおり対照的なしつらえとなっている。

課題としては、東側にあるサルスベリが手前の樹に妨げられ見えにくい点、サルスベリの奥に資材置き場が見える点、橋から北側の園路、加賀田家時代に作られたと思われる延段風の仕上げが、階段の瀟洒な仕上げと趣を異にしている点、階段を上ると正面に見えていたと思われる砂丘中腹にある春日灯籠が視認しにくい点があげられる。



図3-4 庭園西側の橋上からの景観



図3-5 斜面中腹広場からの景観



図3-6 待合からの景観



図3-7 庭園東の石橋とそこからの景観

## 第3節 庭園の地割・構成要素に関する現状と課題

本節では、旧齋藤氏別邸庭園の地割、構成要素に関する現状と課題を整理する。旧齋藤氏別邸庭園は、玄関庭、中庭、主庭、茶庭の大きく4つの庭から構成されている（図2-3参照）。以下、それぞれの庭について、「地割および地形」、「石組・景石・敷石・敷砂利・敷砂」、「植栽・植生の管理」、「水系」、「庭園工作物・石造物」、「景観阻害構成要素」の6つに区分し、現地調査により知見をまとめた。

なお、本節で取り上げた庭園の地割、構成要素に関する課題は、有識者への意見聴取等で提示されたものを集約しており、現在、課題に対してすでに処置が一部おこなわれているものも含まれる。

### 1 玄関庭

#### (1) 地割および地形に関する課題

地割および地形に関する課題として、特に雨天時に門の両脇に雨水が滞水し、地表面が浸食され、公開活用上、来訪者の動線が不安定になるなど、水処理に関する不具合が確認されている。現在、玄関庭には南側の白壁通りへの排水口が1箇所設けられているが、白壁通りの排水側溝も庭園敷地外の雨水が流入するため、雨天時に本庭園の雨水が敷地外に排水されない状況となっている。

また、この雨水は主屋のみならず、脇玄関以東の屋根に降った雨水も玄関庭に集まってくる状況となっている。

#### (2) 石組・景石・敷石・敷砂利・敷砂に関する課題

庭内の石組・景石・敷石・敷砂利・敷砂には大きな損傷はほとんどみられないが、軒内の縁石に欠損が確認される。

#### (3) 植栽・植生の管理に関する課題

高木では、クロマツとモッコクの枝が交錯している箇所が確認される。低木では、ツツジ類が丸形刈込として管理されており、クロマツやモッコクといった高木類との姿景となじまない状況となっている。

#### (4) 庭園工作物・石造物に関する課題

庭内には、銅製灯籠が1基配置されているが、笠の蕨手が一部欠損している。なお、蕨手の欠損部は、現地に保管されている。



図3-8 クロマツとモッコクの枝の重なり



図3-9 蕨手が欠損した銅製灯籠



## 2 中庭

### (1) 地割および地形に関する課題

地割および地形に関する課題として、中庭に面した便所北側の蹲踞周辺が、雨天時に雨水が滞水し、地表面が浸食されるといった水処理に関する不具合が確認される。

また、中庭の西側周囲の植栽地であった箇所が裸地化しており、表土が流失するとともに、中庭から主庭に至る飛石園路を土が覆い、地割を見えにくくさせるとともに、動線としても利用しにくい状況となっている。あわせて、土留め（竹）も劣化している。

### (2) 石組・景石・敷石・敷砂利・敷砂に関する課題

井筒前の飛石園路が埋没あるいは抜き取られた可能性があり、動線が不明瞭となっている（この点の詳細については本章第5節を参照）。

また、中庭西南隅の蘚苔類の繁殖地に、円盤状の高まりが複数確認される。ただし詳細が不明なため、調査が必要である（この点の詳細については本章第5節を参照）。

さらに、手水鉢が司馬温公形に似る蹲踞の海の敷砂利が薄くなっている。

### (3) 植栽・植生の管理に関する課題

植栽・植生に関する課題として、樹勢上の衰弱木が確認される。具体的には、カリン(131)、ユズリハ(150)、ヤブニッケイ(153)であり、いずれも洞穴部分が拡大しつつある。

高木に関するその他の課題としては、井筒前のイロハモミジ(136)の実生木が主屋からの景観を阻害しているほか、四ツ目垣脇のモッコクとクロマツの枝が重なっており、庭園の景観として視線が通らないなどやや問題がみられる。

低木に関する課題としては、ツツジ類の肥大化により司馬温公形に似る手水を配した蹲踞が遮蔽され、景観的にも圧迫感がある。



図3-10 カリンの空洞化



図3-11 釣瓶の劣化状況



図3-12 土留めの劣化と表土の状況



図3-13 中庭の蹲踞周辺の様子

#### (4) 庭園工作物・石造物に関する課題

庭園工作物・石造物に関する課題としては、井筒に設置された井戸屋形・釣瓶の劣化が進行しており、施設が傾くとともに、倒伏の恐れが生じている。また、主屋に設置された袖塀の劣化が進行しており、更新の必要がある。ただし、本施設は加賀田家時代のもと思われるため、更新に際しては構造意匠について検討をおこなう必要がある。



図 3-14 袖塀と配電盤

#### (5) 景観阻害構成要素に関する課題

景観阻害構成要素に関する課題としては、園路から隣家が塀とともに見えてしまう状況である。また、西側塀沿いの配電盤が露出している。

### 3 主庭

#### (1) 地割および地形に関する課題

主庭の地割および地形に関する課題として、特に砂丘の斜面地（東側斜面、中央斜面、西側斜面、竹林の斜面）について、庭園における植栽を含めた空間構成上の位置づけが不明確であるため、地割としてどのような姿を目指すかが不明瞭である。

また、園路動線に関する課題は2点ある。ひとつは主庭の西側の山路園路から田舎屋に達する当初動線が、消失していると考えられる点と、雪見灯籠背後から田舎屋脇を通過する山路園路までの動線が消失していると考えられる点である。ともに、発掘調査による確認が必要である（この点の詳細については本章第5節を参照）。

#### (2) 石組・景石・敷石・敷砂利・敷砂に関する課題

池泉には漏水が懸念されていたため、滝石組、流れ、池泉護岸について、3次元測量を実施し、護岸の緩み、庭石の劣化等に関する詳細調査を実施した。その結果、滝石組、流れ、池泉護岸の各石組の大半は緩みや劣化はなかったが、漏水箇所は特定できなかった。ただし、10箇所程度に、問題がある箇所が判明したので、ここで整理しておく（図3-15）。

滝石組は、各石組の緩みはないが、東面の海老ヶ折石にハゼノキ(394)の実生木が侵入し、節理に沿って海老ヶ折石に亀裂が入っている箇所が確認された。海老ヶ折石の亀裂は、ハゼノキの生長にともない根系が太り、亀裂が拡大する恐れがある。同じ東面の石組のポケットにも実生のイロハモミジ(393)が侵入し、樹木の今後の生長によって根系が石組の根入れを圧迫する恐れがある。流れについては、大きな護岸の緩み、損傷は確認されなかった。池泉の護岸については、図3-15に示すように、数箇所で見つかった。

まず南岸は、石組の背面に切株が残っているものがあり、腐朽による根入れ空洞化が懸念されるもの、また中木が石組の背面に迫っている場合があり、今後、樹木の生長にともなって根入れ地下の根系が石組を圧迫し、護岸の緩みを誘発する可能性があるものが確認された。北岸では、西辺に傾きが認められる護岸石が確認され、西側に架かる石橋の北に打たれた踏石下部に亀裂が確認された。滝石組、流れ、池泉護岸の詳細については、巻末に掲載した立面図で確認されたい。



また、池には、海老ヶ折石による岩島が数島あるが、池の西側石橋脇の岩島が割れて上部が本体から外れていることが判明した。

### (3) 植栽・植生の管理に関する課題

植栽・植生に関する課題として、まず建物や池泉周辺では、第一に、本庭園の本質的な価値を担う構成要素であるサルスベリ (280) の樹勢が著しく低下しており、周辺の樹木からも被圧された状況と

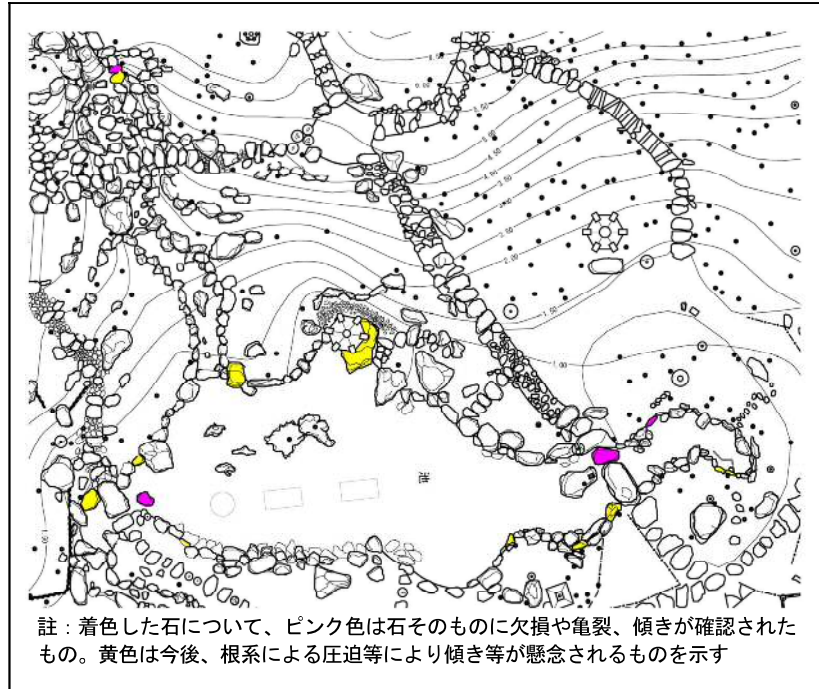


図3-15 滝・池泉の護岸石の状況

なっている。また、斜面のアカマツ (823) は現在幹が裂けており、来訪者の安全確保および景観的な観点から早急に検討する必要性が生じていた。建物を被圧している樹木としては、主屋北西のスタジイ (312, 214)、土蔵北のアカマツ (268)、土蔵東のタブノキ (271)、ヒマラヤスギ (272) が存在する。低木・下草類等については、池泉の南岸・北岸に下草類の繁茂による護岸石組が隠れている箇所があり、芝庭の飛石園路を通りにくくする低木の繁殖と裸地化、主屋東棟の北側の飛石園路両脇にササ類が繁殖し過ぎている箇所がある。砂丘斜面では、東側・中央・西側・竹林斜面について、林床の在り方や高木・竹の高さ管理、密度管理の方針が定まっていない。特に竹林斜面は林床が暗く裸地化が進行している。

### (4) 水系に関する課題

水系については、滝と主屋座敷に付設された鉢前の縁先手水の水量について検討する必要がある。また、夏期はアオコが発生し、水質が低下しているという問題がある。さらに、最近になって水位が低下したということが確認されており、水面より上に露出したコンクリート造の柵の詳細な調査を含め、どのように取り扱うかを検討する必要がある。

### (5) 庭園工作物・石造物に関する課題

庭園工作物として、土蔵東に棟門が現存している。この門は、本別邸に離れが存在していた時代の庭園への入口のため、適切に保存する必要がある。また、滝源泉部西側の壊れた四ツ目垣も検討が必要である。石造物では、増築棟北の四角形灯籠の火袋が損失しているほか、田舎屋脇の層塔の相輪が外れ、田舎屋背後の石積みに転用されている課題がある。

### (6) 景観阻害構成要素に関する課題

景観阻害構成要素に関する課題としては、竹林の土留めに瓦が使われ、田舎屋の背後がブロック塀で、竹林内の設備の配管 (循環用のパイプと電気の蛇腹の保護管) が露出しているなど、竹林周辺に景観的に不協和な状況が発生している。

主庭東側では、荒んだ状況の資材置き場があり、景観上好ましくない状態となっている。



水関係の点では、来訪者が通常は立ち入らない場所ではあるが、滝の源泉部脇のパイプが目立っているほか、池泉東の池尻に水道管が露出しているといった課題があげられる。



図 3-16 位置づけを検討すべき斜面



図 3-17 護岸石組を隠す下草類等



図 3-18 滝石組に侵入した実生木



図 3-19 下部に亀裂の入った護岸飛石



図 3-20 主屋周辺のササ類の繁殖状況



図 3-21 水面から露出したコンクリート



図 3-22 田舎屋脇の石積みの状況



図 3-23 竹林内の土留めの瓦



## 4 茶庭

### (1) 地割および地形に関する課題

まず茶室南側の平地部分が雨天時に滞水する点があげられる。また、茶庭の西側は、現在庭園管理のための資材等をおくスペースとなっている。ここは公開されていない箇所であるが、滝の源泉部の土留めの風化が相当進行しており、表土流出が懸念される。

### (2) 石組・景石・敷石・敷砂利・敷砂に関する課題

茶庭には、外露地と内露地にそれぞれ蹲踞が設置されているが、それぞれに水漏れが確認されている。また、茶室および茶庭に至る飛石園路には、齋藤家の家紋を意匠した瓦が使用された箇所があり、齋藤家時代のしつらえではまず考えられないことや、齋藤家の家紋を来訪者に踏ませるといった状況を考慮すると、その取扱いについて検討する必要がある。

### (3) 植栽・植生の管理に関する課題

外露地および内露地には、本庭園の本質的価値を担っている「根上がり松」(クロマツ(678, 692)、アカマツ(685))が現存している。これらは、樹木医学的な保存処置が継続的におこなわれているが、今後も適切な維持をはかっていく必要がある。

茶室や待合の屋根を被圧する樹木には、根上がり松のクロマツ(692)、茶室と北側の塀との間のクロマツ(693)、タブノキ(856)があり、樹冠の大きさに留意する対策が求められる。また、層塔の周辺の樹林が繁茂しており、層塔の存在感が失われている。また、待合と茶室の間の平坦地が旧来の芝生からコケに変容したといった課題があげられる。

### (4) 庭園工作物・石造物に関する課題

石造物では層塔の相輪が外れていること、茶室脇の化灯笼、六角型寄灯笼の火袋が失われている課題がある。また、滝源泉部西側の壊れた四ツ目垣も検討すべき点といえる。



図3-24 茶庭西側の風化した土留め



図3-25 飛石に転用された齋藤家の瓦



図3-26 コケの広がった園地



図3-27 層塔の建つ樹林の状況



以上、旧齋藤氏別邸庭園について、玄関庭、中庭、主庭、茶庭それぞれの地割、構成要素に関する現状と課題を述べたが、これを整理したものが図3-28である。

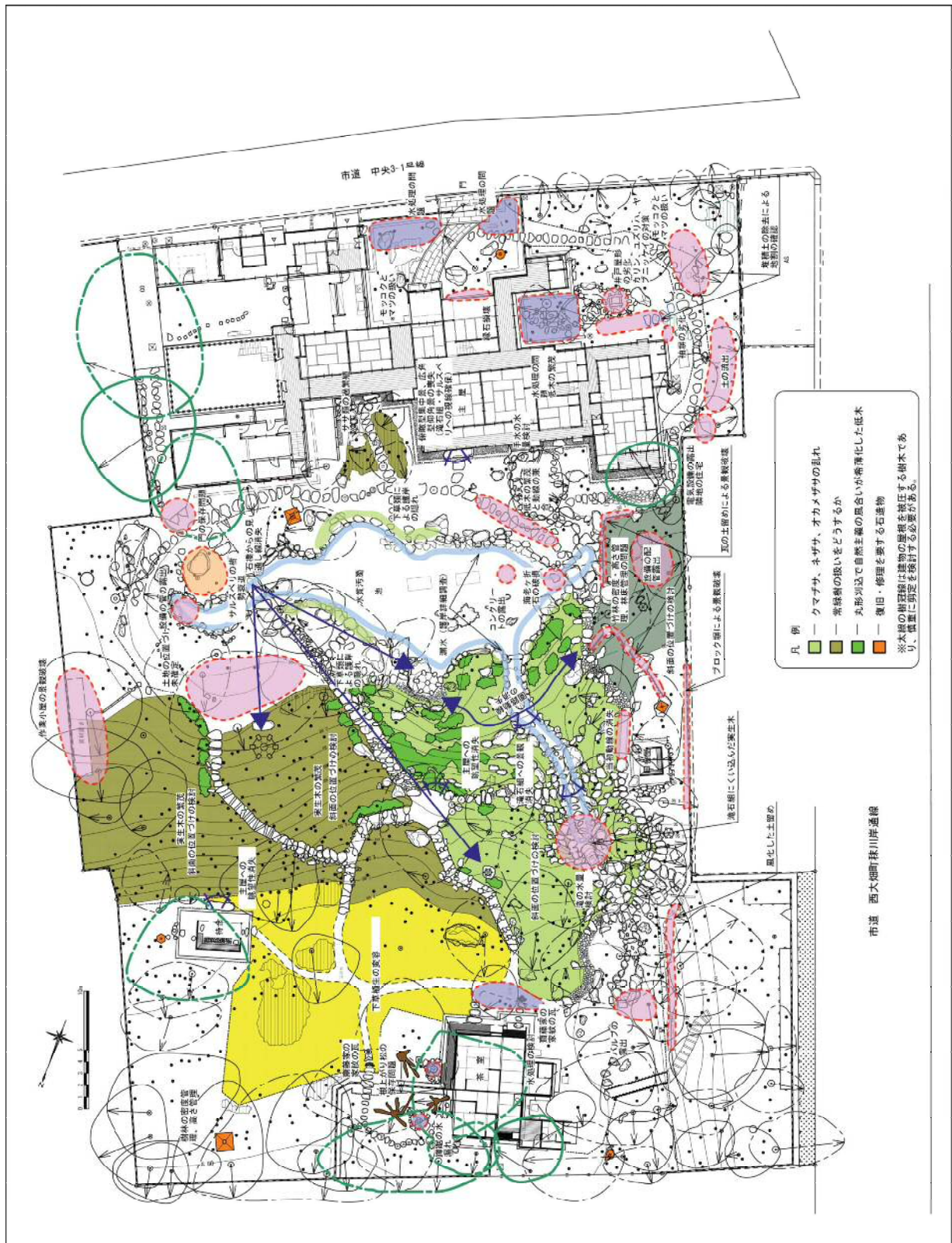


図3-28 旧齋藤氏別邸庭園課題抽出図